

論
説

ハイエクと均衡理論

酒
井
弘
格

はじめに

これまで筆者は、計算論争の標準的説明と代替的説明のどちらが正しいか、という問題を解くために、ハイエクによる 1935 年の計算論争の第一論文「問題の性質と歴史」および第二論文「論争の状況」を検討してきた。^①その中で、筆者は、次のことを示した。すなわち、ハイエクには、たしかに均衡理論を超える具体的事例を指摘した箇所はあるものの、その分析枠組みは均衡理論を超えたものではなかった。むしろ、均衡理論が理論的にも、また具体的事例の説明にとっても、必要な基礎だと考えていたからこそ、それを前提として、実際の経済生活において分散された知識の活用が必要であることや、競争によって知識が発展しなければならないことを指摘していた。これらは、均衡の攪乱と収束の過程として位置づけられていたのである。こうした特徴をふまえて、筆者はハイエクを「あまり厳密でない均衡論者」と位置づけることを提案した。

ただし、これまでの筆者の検討対象は、1935 年の二つの論文にとどまっており、それ以降のハイエクの議論には触れていなかった。

そこで本稿では、1940 年にハイエクが「エコノミカ」誌に発表した計算論争の第三論文「社会主義計算…競争的「解決」^②」を中心に検討し、右の位置づけに変化がないことを確認することにした。

1. 論争の整理

① 論争の第一段階の整理

ハイエクの第三論文は、それまでの計算論争の歴史を整理するところから始まっている。その中でハイエクは、自身の第一論文と第二論文を、それぞれ計算論争の第一段階と第二段階に対応させている。

まずは、筆者の立場から、ハイエクのこの計算論争の歴史の整理を読み直し、計算論争に対する評価を明確にしておきたい。

ハイエクは、自身が書いた計算論争の第一論文「問題の性質と歴史」を、論争の第一段階にあたるものだった、と位置づけている。

そこでハイエクが行ったのは、「社会主義は、価値に換算した計算を完全に不要にし、エネルギーや他の何らかの物理的な大きさの単位にもとづいた、ある種の実物 (*in natura*) 計算に置きかえるだろう」と考える社会主義者たちに対する批判であった。批判を受けて、少なくとも経済学を理解する社会主義者たちは、実物計算にもとづく社会主義の考えを、決定的に放棄することになった。⁽³⁾

ハイエクの批判は、それ以前になされたミーゼスらの批判と同種のものである。ミーゼスらの批判は、「生産の社会的計画は、有名な「価値」の関与なしに、非常に単純に解決されるだろう」と考える社会主義に対するものであった。⁽⁴⁾ ミーゼスらは、こうした社会主義の構想に対し、「社会主義共同体が合理的に行動しようと望むならば、その計算は、資本主義社会に適用されると同じ形式的法則によって導かれなければならないだろう」と指摘したのであった。⁽⁵⁾

ところが、このこと自体は、すでにプレートやバローネが指摘していた。それゆえ、ミーゼスらの批判は返答されたのであって、批判者たちは第二の防衛線へと退却を余儀なくされたのだった、と社会主義者たちは主張しはじめた。⁽⁶⁾

しかしハイエクによれば、ミーゼスらが指摘したのは、単に社会主義社会も資本主義経済と同じ形式的法則に導かれねばならない、ということだけではなかった。ミーゼスらは、経済理論の形式的原理が「市場なしに実際に適用されるかどうか」ということを問題にしていたのである。ミーゼスらの指摘を受けて、社会主義者たちは、「それまで誰も考えたことのなかった全く新しい図式を設計させられた」のである。よって、実際に後退したのは社会主義者だった、というのがハイエクの主張であった。⁽⁷⁾

これをまとめれば、ここでの争点は、ミーゼスらによる社会主義批判が、社会主義においても資本主義経済と同じ経済法則が適用されざるをえないと指摘したことにとどまるのか、それとも、それを実際に適用した社会主義経済を具体的に示すよう迫ったのか、ということである。

前者と後者のどちらが正しいのだろうか。筆者がその答えを導くためには、ミーゼスをはじめとする社会主義の批判者たちの論文を、それぞれ検討しなければならない。ただし、どちらも計算論争の標準的説明のバリエーションであり、標準的説明と代替的説明のどちらが妥当かという問題ではないので、ここでは追求しないことにしたい。

ここでは、筆者がこれまで明らかにした点を、繰り返すことにとどめておく。それは、標準的説明がおおむね妥当だということである。⁽⁸⁾そして、その中でバリエーションがある理由として、一つに、ハイエクにおいて「社会主義」の意味や、「理論的」な不可能性と「実践的」な不可能性の関係が曖昧だったこと、⁽⁹⁾二つに、ミーゼスの事実上の後退を、ハイエクが過小に表現しようとした可能性があること、⁽¹⁰⁾が考えられるということである。

②論争の第二段階の整理

つづいてハイエクは、論争の第二段階にあたる自身の第二論文「論争の状況」を、次のように要約している。

すなわち、社会主義者たちは、実物計算による社会主義をほぼ放棄し、それにかわって、「価値が、競争による決定に任されるのではなく、計画当局による、数理経済学の技術を利用して実行される計算過程によって発見されるべきである」^①と提案した。

この提案に対して、ハイエクは、次のバレートの文章を紹介し、これが最終的な解答である、と述べている。それは、

「この「均衡価格の」決定は価格の数的計算に到達するという目的をもつものでは決してない、ということにここで言及してもよいだろう。そうした計算にとって最も都合な仮定を作ってみよう。問題についての与件を発見するという困難をわれわれが全て克服し、各個人にとつてのさまざまな商品全てのオフ、エリ、ミテ「効用」と、全ての商品の全ての生産条件をわれわれが知っている、等々と仮定しよう。これはすでに作るのがばかばかしい仮説である。しかしそれは問題の解答を可能にするのに十分ではない。すでにみたように、100人と700の商品の場合、70699の条件が存在するだろう（実際には、われわれがこれまで無視してきた大量の数の諸事情が、その数をさらに増加させるだろう）。したがって、われわれは70699の方程式の体系を解かなければならない。これは実際上、代数的分析の能力を超えている。また、四千万の人口と数千の商品のために手にする信じられない数の方程式を考察するならば、このことははるかに真実である。この場合、役割は入れ替わるだろう。

数学が政治経済学を補助するのではなく、政治経済学が数学を補助することになるだろう。言い換えれば、もし人がこれらの全ての方程式を実際に知りえたとして、それらを解く唯一の人間の能力で利用しうる方法は、市場によって与えられた実際上の解決を観察することなのである。」

というものである。⁽¹²⁾

ハイエクは、ここでも社会主義者たちが論争の内容を誤解した、と主張している。社会主義者たちによれば、そもそも中央当局の数学的計算による解決法は、「現代の社会主義の著者たちの努力を嘲笑することを意図した、批判者による悪意ある発明」だった、というのである。それに対してハイエクは、この解決法が「社会主義の著者たちによって一度ならず真剣に示唆された」ものだった、と反論している。⁽¹³⁾

このようなハイエクによる論争の第二段階の要約について、筆者は次の二つのことを指摘しておきたい。

一つに、筆者は、ハイエクの第二論文を分析した際に、ハイエクが均衡理論を超える事例を断片的に描写していたけれども、結局のところ均衡理論を支持していた、ということを示した。均衡理論は妥当だが、そこで考慮すべき要素があまりに多く、かつ頻繁に変化するので、中央当局に知識を集中させて均衡理論を実現するのは実践的に不可能であり、自発的な諸個人の調整に任せることによって目指さざるをえないというのが、ハイエクの中心的な結論であった。筆者は、そのことを指摘し、ハイエクを「あまり厳密でない均衡論者」と呼んだのであった。

ハイエクが、ここで、第二論文の結論を、パレートの引用のみに拠ったことは、まさにハイエクが均衡理論に依存していたことを裏づけるものである。この引用でハイエク（とパレート）は、均衡理論自体の妥当性には疑いを持っていない。しかしその理論がそもそも「価格の数的計算に到達するという目的をもつものでは決してない」ことに、

注意を促している。なぜなら、価格の具体的な数値の算出のためには、少なくとも「各個人にとつてのさまざまな商品全てのオフエリミテ」「効用」と、全ての商品の全ての生産条件をわれわれが知っている」ことが必要であるが、これは実践的に、不可能だからである。さらに、もしこれらを知りえたとしても、例えば「100人と700の商品」の場合でも「70699の方程式の体系」を解かなければならず、さらに「四千万の人口と数千の商品」の場合には「信じられない数の方程式」を解くことになる。それを机上で人間が計算するのも実践的に不可能であり、その計算結果は、「市場によって与えられた実際上の解決を観察する」ことによって得るしかない、とハイエク（とパレート）は言っているのである。

二つに、第二段階における争点は、ハイエクが第二論文で批判したところの、社会主義者による数学的方法の提案は本来に存在したのか、それともハイエクの創造にすぎなかったのか、である。ハイエクは第二論文において、批判対象とする社会主義者の議論を、次のように示していた。すなわち、イギリスにおいて、この議論は「非常に萌芽的段階」であつて、デイキンソンが論文のなかで示唆しているほか、より若い何人かの経済学者がそれをさらに進めているけれども、彼らについては「まだ出版された著作に言及できない」⁽¹⁴⁾。それゆえ、ハイエク自身が討論で得た内容を批判対象とする、ということであつた。

このようにハイエクの批判対象は、デイキンソンの論文の示唆を除き、ほとんど客観的に明らかにできるものではなかった。そのため、社会主義者から、このような主張をしたことはない、と言われたのである。

この争点についても、どちらが正しいかという答えを導くためには、当時の論争の状況を包括的に検討し、数学的方法を主張した社会主義者が本当にいたかどうかを調べなければならぬ。ここでは、本稿で中心的に取り上げる論争の第三段階の試行錯誤法に対して、ハイエクが、数学的方法によって解決できなかった問題を解決できているとは

ほとんど思えない、と指摘していることだけ確認しておきたい。^⑮つまり、数学的方法へのハイエクの批判の内容が、そのまま試行錯誤法への批判に転用される、ということである。

そのため、数学的方法を主張した社会主義者がいなかった場合はもちろんのこと、いた場合でも、数学的方法の段階を省略して、次の第三段階を実質的な第二段階とみなすことには、一定の合理的な理由があるだろう。なぜなら、それらの社会主義の欠陥とされるものが、同じだからである。

本稿の目的にとっては、第二段階の数学的方法の批判と、第三段階の試行錯誤法の批判とで、ハイエクの議論の内容が本当に同じなのか、それとも均衡理論を批判し、新しい市場観を提示する方向に変化したのかどうか、を確認する必要があるだろう。

2. 試行錯誤法へのハイエクの批判

① 全体的な評価

ハイエクの第一論文と第二論文は、いずれも批判の対象がはっきりしなかった。そこに、社会主義者から反論される余地があった。この第三論文は、ランゲとディキンソンの著作で示された社会主義の試行錯誤法を批判の対象としており、明確になっている。

ランゲとディキンソンの試行錯誤法とは何か。ハイエクは、次のように紹介している。

彼らはともに、相対価格の決定のために、ある程度、競争メカニズムに依存する。しかし彼らはともに、価格が市場で直接に決定されるままにしておくのを拒否し、かわりに、中央当局による価格決定のシステムを提案する。そこでは、特定の商品市場の状態、すなわち需要の供給に対する関係が、単に、当局にとって、設定価格が上げられるべきか下げられるべきかの指標としてのみ役立つのである。⁽¹⁶⁾

この方法は、資本主義経済に近いけれども、資本主義経済では取引の当事者が商品の価格を自由に決めることができるのに対し、この方法では中央当局が価格の排他的な決定権をもっており、取引の当事者は価格決定の自由を持っていない。

そこでは次のようなプロセスによって、価格が決定される。まず中央当局は、全ての商品の価格を暫定的に決める。その価格を所与として、人々のあいだで自由な取引が行われる。これは均衡価格ではないので、さまざまな商品の余剰や不足がいたるところで発生するだろう。もし商品の余剰が生じれば、次の価格改定の時期に、中央当局はその価格を下げる。もし商品の不足が生じれば、逆に価格を上げる。これを繰り返すうちに、やがて政府は適切な均衡価格を発見できるだろう、というものである。商品の生産方法や消費者の選好に大きな変化があったときには、また同じプロセスをたどって適切な価格にいたる必要があるけれども、それ以外の小さな変化の場合は、些細な調整ですむだろう。⁽¹⁷⁾

このような社会主義の試行錯誤法に対してハイエクは、中央当局が、「遅滞なく全ての価格を、ちようど必要な量だけ変更する」ことができるならば、これは成り立ちうる、とする。すなわち、この方法に「論理的不可可能性」はない。しかし、「実践的可能性」という点では、これはは資本主義経済に比べてはるかに非効率的であろう、としている。⁽¹⁸⁾

その理由は、次のようなものである。

この特定の提案が、静態的均衡の純粹理論の問題への過度の没頭から生まれたものである、という疑いを抑えることは難しい。もし現実の世界において、われわれがほぼ恒常的な与件を扱わねばならないのならば、すなわち問題が、その後長いあいだ多かれ少なかれ不変のままにしておけるような価格体系を発見することならば、そのとき、考慮中の提案はそれほど完全に非合理的ではないだろう。所与で恒常的な与件があれば、そのような均衡状態は、試行錯誤の方法によって、たしかに接近されるだろう。しかしこれは現実の世界の状況からほど遠いのであり、ここでは恒常的な変化が原則なのである。望ましい均衡に接近しつつあるものにはたして到達するかどうか、またどの程度到達するかは、調整がなされる速度に完全に依存している。実践上の問題は、特定の方法が仮說的均衡に最終的に導くかどうかではなく、どの方法が、異なる場所や異なる産業における日常的に変化する諸条件への、より速くより完全な調整を保証するかである。⁽¹⁹⁾

この説明から、ハイエクが均衡理論そのものを否定していないことが読み取れる。ただし、均衡理論といっても、静態的な均衡状態が永続すると想定しているわけではない。何らかの条件の変化があれば、一時的に均衡が攪乱され、それがふたたび均衡化するという過程も必要である。社会主義者は、そうした攪乱と均衡化が、まれにしか生じないと考えている。⁽²⁰⁾ それゆえ、中央当局が試行錯誤によって均衡価格を発見することは合理的なのである。それに対してハイエクは、諸条件の変化が非常に頻繁に生じるという事実を指摘している。それゆえ、攪乱と均衡化という同じプロセスをたどるにしても、中央当局ではなく、それぞれの取引の当事者がその場で価格を変化させたほうが、より速

くより完全なプロセスを実現できるのである。

右の引用で、ハイエクが試行錯誤法における静態的な均衡理論への「過度の没頭」を批判しつつ、均衡理論そのものを否定していないのは、この理由によるのである。

こうした内容は、ハイエクが均衡論者だったという筆者の主張を裏づけるものである。

ところでハイエクは、試行錯誤法に対するこのような全体的な評価に加えて、いくつかの個別的な論点に言及している。以下では、それらを検討していきたい。

②均衡化の時間の問題

いま、試行錯誤法では、諸条件が変化し、攪乱が生じたときに、それが均衡化されるまでの時間が長いということであった。ハイエクは、その理由を次のように説明している。

試行錯誤法では、中央当局が「要素評価表」という全ての価格のリストを作り、これのみが、一定期間における唯一の正当な取引価格とされる。この要素価格表の改定が、定期的に行われるのか、それとも必要に応じて行われるのか、デキンソンらははっきりしないけれども、いずれにせよ、ともかくその改定は、取引の当事者が自分たちの判断で価格を改定できる資本主義経済に比べ、遅れて生じることは疑いない。⁽²⁾ このことについてハイエクは、

現実の競争では、直接に関係する当事者が、諸条件が変わったと知った時に、価格変化が生じるのに対し、中央経済委員会は、当事者が報告し、報告が確証され、矛盾が解消され、等の後にのみ、行動できるようになるだろ

う。そして関係する全ての当事者に通知された後でしか、新しい価格は有効にならないだろう」²²⁾

と、説明している。

経済的効率性の観点からは、状況の変化に応じて、価格がなるべく速く変化することが望ましい。しかし試行錯誤法は、実践において、価格が変化するまでにかなり長い期間を必要とする。よって、試行錯誤法は、資本主義経済に比べてはるかに劣るだろう、というのである。²³⁾

このようなハイエクの説明は、ハイエクは均衡理論に依拠しつつ、攪乱からの均衡化の速さを、実践上の問題としている、という先の理解を補完するものだといえよう。

③財の種類の問題

ハイエクは、試行錯誤法では「質の違いや、時と場所の状況の違いによる商品価格の違いは、少なくなるだろう」と言っている。なぜなら、このような違いを考慮して、それぞれを別の商品とみなすとすれば、中央当局が価格を決定すべき商品の種類が、ほとんど無限になり、その作業があまりに煩雑になってしまうだろう。それゆえ、中央当局には、ある種の財の集まりに同一の価格を与えるという単純化が必要になるのである。²⁴⁾

しかしながら、これは、生産管理者が、特別な機会や特別な取引など、特別な局地的条件によって与えられる全ての小さな有利さを利用する誘因や、現実の可能性すら持たないだろう、ということを意味する。なぜなら、こ

うした全てのことは、彼らの計算に入りえないからである。それはまた、その結果の事例をもう一つだけ挙げるならば、突然の希少性を迅速に元に戻すために追加費用を被ることが、実践的に不可能だろうということを意味する。なぜなら、局地的、あるいは一時的な希少性は、公的機関が行動するまで、価格に影響を与えないからである。⁽²⁵⁾

このように述べるのであるが、ここでハイエクは財の種類が非常に多いことを指摘している。その原因は、同じように見える商品のあいだに、技術的差異ではなく、時と場所の特定の状況に起因する一時的な差異があるからである。差異が多いことは、社会において利用されるべき知識が多いことでもある。こうした多くの知識を、中央当局が収集するのは困難であるから、中央当局はそれを、価格の決定のさいに十分に利用することができない。それに対して資本主義経済では、個々の取引の当事者たちが自発的に価格を調整しあうことができ、このときには一時的な差異の知識を利用することが可能である。

このようにハイエクの説明を理解するならば、ここでハイエクは第二論文と同じことを述べている。筆者が以前に指摘したように、財の種類が非常に多いことを突き詰めれば、全ての財が個物であるという主張に行きつくはずである。それは均衡理論を批判しうる論拠となりうるけれども、この箇所では、そうした議論を行っていない。⁽²⁶⁾

ただし、この第三論文の別の箇所では、そうした議論も見られる。

ハイエクは、そこで機械、建物、船など重工業製品に言及している。こうした製品の多くは、個別の注文に応じ、特殊な契約にもとづいて生産される。それゆえ短期間に二度も生産されることが、ほとんどない。その潜在的な生産者や消費者は、個別の取引によって異なることが多い。こうした製品の場合、中央当局が一定の期間、あらかじめ価

格を決定するという方法は、「単純に適用不可能である」。もし標準化された商品であれば、「需要と供給を等しくする」ような価格を決定できるだろうが、標準化されない商品では、これが不可能だからである。⁽²⁷⁾

ここでは、ハイエクが、全てが個物である場合に、均衡理論が成り立ちえないことを指摘しているといえるだろう。そこからハイエクは、試行錯誤法の結果を、次のように想像する。

ここで、もし価格が中央当局によって決定されるべきであるならば、全ての個々の事例で、その当局による全ての潜在的な供給者と全ての潜在的な購買者の計算の調査を基礎として、決定されねばならないであろう。「中略」これら全ての事例で、当局が事実上企業者の全ての機能を自身で受け取るのではないならば（すなわち、提案されたシステムが放棄され、完全な中央指導の一つに代替されないならば）、価格決定過程は過度に厄介で無限の遅延の原因になるか、あるいは純粋な形式性になるかどうかというのは、明らかではないだろうか？⁽²⁸⁾

ここでハイエクが説明しているのは、中央当局が全ての潜在的な供給者と購買者についての知識を収集せねばならなくなる、ということである。もし中央当局がこれを容易に集められるならば、解決は可能である。しかしあまりに多いので、中央当局の決定には無限の時間が必要になるのである。それに比べて資本主義であれば、それぞれ断片的な知識を持った当事者が、自発的に調整することによって解決できるのである。

ここでは、均衡理論の批判が影をひそめてしまっている。というのも、この説明は、経済が非常に複雑であることと、社会主義は決定が集権的であり、それに比べれば資本主義は分権的であるという事実が揃いさえすれば、それ以上の経済のメカニズムは何であれ、成り立つからである。ハイエクは途中まで均衡理論を批判しているように見えた

けれども、結局は、先に見たのと同じく、経済の複雑性という事実を前提とした、均衡理論にもとづく批判を展開しているのである。

言い換えれば、ハイエクの批判は、理論的な側面を指摘しつつも、実質的には実践的な批判だったといえるのである。

④企業者の機能の問題

ハイエクはまた、社会主義では、新しい生産技術の発見が十分にできないだろうと指摘している。²⁹⁾

ハイエクによれば、経済において、最も安価な生産方法は、企業者によって、ほぼ毎日のように発見されねばならないものである。しかもその役割を果たす企業者は、現在の工場の責任者になっているような既成の企業者であることは少なく、むしろほとんどの場合、全くの部外者である。

資本主義においては、「より安価な方法を知っている人は誰でも、彼自身のリスクで参加し、他の生産者より安値をつけることで顧客を魅了する機会」がある。それゆえ、より安価な方法が発見されていくのである。

それに対して社会主義の試行錯誤法では、当局によって価格が決定されるので、同じことができない。そこでは、「変化した諸条件に対する生産技術のあらゆる改善、あらゆる調整は、中央経済委員会に対して、問題の商品がより安価に生産することができ、それゆえ価格が低下されるべきであると説得することに、依存するだろう」。

このように自分のほうがよりよく生産できると考える部外者がいても、彼のあらゆる計算は「当局によって試験され是認されなければならない」のだから、結局のところ、当局が「企業者の全ての機能を乗っ取る」ことが必要にな

るだろう。

このようにハイエクは述べている。

ここでハイエクは、「変化した諸条件に対する生産技術のあらゆる改善、あらゆる調整」と言うように、技術的知識に言及している。

技術的知識については、前稿で見たように、ハイエクが社会主義の数学的方法を批判した際^{③〇}、技術的知識を、その思考の技術も含めて、全て中央当局に集中することができるとすれば、社会主義であつても技術を発展させることは可能であることを認めていた。

ここでハイエクは、社会主義の試行錯誤法でも、結局は、当局が「企業者の全ての機能を乗っ取る」必要が生じると述べている。そうであるから、前稿と同様に、もし技術的知識を集中できると想定すれば、この仕組みは機能しうることになるだろう。しかし、そうした想定は、前稿でも見たとおり、ハイエクにとって「ばかげた発想」でしかないのである。

現実には、新しい生産技術を生み出さうる企業者は、部外者も含めて、無数に存在する。つまり、技術的知識が人々のあいだに限りなく分散している。それゆえ、こうした知識は、分散されたまま利用しなければならない。そのためには、自身が最善の方法を知っていると信じる企業者たちが自由に参加し、価格システムの下で、最も低い価格をつけたものだけが生き残るという競争を通じて、真に最善の方法を見つけなければならない。これが資本主義なのである。

繰り返しになるが、ここでハイエクは、価格競争がなければ新しい生産方法を発見できない、と言っているわけではない。中央当局がさまざまな潜在的な企業者の事業計画を聞き、その中から選択する方法で、新しい生産方法を発

見し、実行できる。ただし、中央当局は全ての必要な知識を聞くことができないので、それができる知識の範囲でしか、それを行えないのである。あるいは、いくつかの企業者に自らの事業計画を実行させ、どちらがより多くの生産を可能にするか、競争させることが考えられるかもしれない。しかしこの場合でも、こうした企業者は自己資金をもちえないので、中央当局が資金を配分することになり、その過程で、中央当局の持ちうる知識の量によって参加者が制限されることになるだろう。

ここでのハイエクの貢献は、前稿でも見たとおり、非常に大きいものだといえよう。しかし、先に見たとおり、これは社会主義の試行錯誤法の論理的な欠陥ではなく、あくまで実践的な不可能性を指摘したものである。ハイエクが批判したのは、均衡理論への「過度の」没頭であった。攪乱と均衡化が非常に少ないときには、中央当局が消費者の選好や技術的知識の例外的な変化に経済を適応させながら、これを運用できることは、ハイエクも認めていた。しかし、非常に複雑な経済環境において、攪乱が頻繁に起こるといふ事実的狀況下では、より迅速な適応が必要である。それゆえ、知識を分散したまま活用できる価格メカニズムを利用する資本主義のほうが効率的だと、ハイエクは主張しているのである。これは、均衡理論を否定したことにはならない。

ところで、ここで、ハイエクを批判したシュンペーターと比べてみよう。シュンペーターは、静態的な均衡理論に動態的な発展理論を加えたことで有名であるが、ハイエクと異なり社会主義は可能だとも主張していた。シュンペーターにとっては、資本主義も社会主義も、同一の経済理論に依拠するのであり、社会主義ではそれが機能しないということはなかった。ただし、資本主義がすでに十分に発展し、静態的狀態に近づいた後でなければならない、という条件をつけていた。現代は、独占資本主義ないし拘束された大企業型資本主義と呼ばれる段階に達しており、そこでは経済発展は、無数の個人が参加する冒険の事業から、高度な専門家による科学的に予測可能なものへと変化してい

る。この段階における資本主義と同程度の役割であれば、社会主義は果たしうるのであった。³¹⁾

このようにハイエクとシュンペーターの社会主義への態度の違いは、理論よりもむしろ資本主義の現状の認識に依拠していた。ハイエクは現場の個々の企業者が重要だと考えたのに対し、シュンペーターはその役割の多くを中央集権化できる段階に達したと考えたのである。

⑤ 投機的行動の問題

今度は、「将来の価格の動きの予測の問題」³²⁾についてのハイエクの指摘を検討したい。

ハイエクによれば、個々の工場の管理者が商品を生産するとき、その生産費は、単にその生産期の諸要素の価格に依存するのではない。むしろ多くの場合、将来の諸要素の価格を予見したうえで、適切な時期に購入することができるかどうか³³⁾に依存する。このことを、ハイエクは次のような例をあげて説明している。すなわち、「機械を酷使したり潤滑油を節約したりするのが経済的なのか、また、需要の所与の変化に対して大きな調整を行うべきかそれとも現存の組織を可能な限り続けるべきか、実際のところ現在どのように生産すべきかについてのほとんど全ての決定が、少なくとも部分的には、将来について持っている見解に依存するのである」³³⁾。

このように生産費が、個々の生産者が予測するところの諸要素の将来の価格によって異なってくるのであれば、均衡理論は成り立たなくなってしまうだろう。³⁴⁾

しかしハイエクは、ここでも均衡理論の問題に取り組もうとはしていない。ハイエクが指摘するのは、社会主義において、諸要素の価格の変化は完全に中央当局の決定に依存するのだから、個々の工場の管理者が将来の価格を予測

するとき、その結果の全責任を管理者が負わされるのはおかしい、ということである。だからといって、管理者の将来予測の役割を中央当局が引き受けるようになれば、数学的方法と同じことになるだろう。実際の方法としては、管理者が適切な予測を行ったかどうかを中央当局が監査することが考えられる。しかしこの方法では、個々の管理者の予測が適切だったかどうかは、経済的効率性という結果ではなく、中央当局がそれを適切だったと認めるかどうかによって決まることになる。これが、「官僚制の最悪の形態」を導くだろうというのが、この問題へのハイエクの結論になっている。⁽³⁵⁾

資本主義経済では、個々の企業者は、その経済的成功ないし失敗によって、自らの判断の責任をとらされる。しかし社会主義の試行錯誤法では、中央当局と個々の管理者のあいだで、責任の所在がはっきりしないため、無責任体制にいたるだろうというのである。

こうしてハイエクは、均衡理論を批判する機会であったにもかかわらず、論争の最初に排除したはずの、倫理（道徳）⁽³⁶⁾的問題を指摘するのである。⁽³⁷⁾

せめてハイエクは、中央当局による監査は結局のところ、数学的方法と同じものとなり、分散された知識を中央当局に集中できないので機能できない、とだけいってべきであった。

3. 結論

ここでハイエクの議論を整理しておこう。ハイエクは、第二論文と全く同じように、ところどころで均衡理論を超えうる可能性を指摘していた。しかし実際には、均衡理論を超えたわけではなかった。シンペーターが社会主義と

資本主義の経済理論は同一であるといったのと同じように、ハイエクは静態的な均衡理論に、動態的な経済発展を加えたイメージを持っていた。

ハイエクの特徴は、商品の種類が極めて多く、また些細なものも含めて経済発展の頻度も高いため、知識を中央当局に集中させることができず、分散させたまま価格メカニズムを用いざるをえないとした点にあった。これはハイエクの大きな貢献だけれども、その原因は事実についての前提が異なるところにあった。計算論争の一般的な意味でいえば、理論的ではなく実践的な違いである。よって、計算論争の標準的説明はおおむね妥当であろう。オーストリア学派の代替的説明のように、ハイエクの市場観が新しいものに見えたのは、次の理由からであった。すなわち、社会主義者が商品の種類を過小にとらえ、また経済発展が少ないと考えたため、静態理論に多くのエネルギーを注いだのに対し、ハイエクは逆に動態的な部分により注目したからであった。ただしその動態は、理論的には、均衡の攪乱と収束のそれであったため、均衡的世界観から脱却したとはいえないであろう。

4. その後

筆者の考えでは、1940年の「社会主義計算・競争的「解決」」の立場は、その後も大きくは変わらなかった。ここで1946年の「競争の意味」と1976年の「発見手続きとしての競争」という二論文を概観しつつ、そのことを示しておきたい。

①「競争の意味」

ハイエクは論文「競争の意味」⁽³⁸⁾において、二種類の市場を分けている。

一つは、穀物市場のような、「多くの生産者によって生産され、完全に標準化された商品」の市場である。そこでは、ほとんどの関連する諸状況が市場の全ての成員にほぼ同じ程度知られている。ここでは、「あらゆる重要な変化の知識は、非常に急速に広がり、またそれへの適応は非常に即座にもたらされるので、われわれはふつう単純に、この短い移行期のあいだに起こることを軽視し、その前と後に存在する二つの均衡近傍の状態を比較することに自らを制限する」、とハイエクは言っている。⁽³⁹⁾

すなわちハイエクは、均衡状態がほぼ実現していると考えられる市場においては、攪乱が起きた後、すぐに均衡状態になるので、二つの均衡のあいだに起こることは重視されないと、指摘している。

他方で、「類似の代替物の多様性が大きく、急速に変化する」商品の市場では、適応が緩慢になる。この場合は、移行期が連続的に発生する、とハイエクは言っている。⁽⁴⁰⁾

この場合も変わらず、ハイエクは均衡状態から攪乱を経てふたたび均衡にいたるという分析枠組みに依拠している、と考えられる。ただし、変化に対して適応が緩やかであるため、実際には均衡に到達できず、移行期ばかりが続くように見える。ここでは二つの均衡のあいだが重要になる。

攪乱を均衡へと向かわせる方法として、ハイエクは二つがあると指摘している。一つは、「完全知識を持つ人間ならば何をするだろうか」と考えるものであり、もう一つは、「現存の人々が持っている知識を最善に利用する」ものである。⁽⁴¹⁾ 多くの人が同じ標準化された商品を提供できることはめったにないのだから、多くの場合は、後者の方法を考

えるべきだろう。この後者の方法とは、要するに、価格システムを用い、市場の参加者たちがそれぞれ適応していく⁽⁴²⁾というものである。

このように「競争の意味」は、均衡の攪乱にさいして、価格システムに依拠して分散された知識を有効利用し、均衡化を実現する、という考えであった。ハイエクは他にも、市場競争の実態をさまざまに指摘している。しかし、「われわれの現在の目的にとって、そのような種類の市場の完全な分析のようなものを試みる必要はない⁽⁴³⁾」と述べているように、多くの部分は、分析というよりも、現実の市場の描写であったと考えられる。

以上から、ハイエクの立場が変わっていないことが、示されるだろう。

②「発見手続きとしての競争」

1968年の講演をもとにした論文「発見手続きとしての競争⁽⁴⁴⁾」では、ハイエクは、これまで経済学者たちが非現実的な前提をもとに競争を論じてきた、と批判している。その非現実的な前提とは、「もし誰かが、経済理論が与件と呼ぶものについて、本当に全て知っているならば⁽⁴⁵⁾、というものである。しかし現実には、「社会に広く分散された知識の利用」は、「個々の状況において、よく知られた物事の全ての特定の利用を知っているような個人には、依存できない⁽⁴⁶⁾」のである。

このように知識が一カ所に集中しておらず、広く分散されている現実において、それを利用するための道具が、価格である。市場での価格競争を経て、やがて「個々の計画の相互調整⁽⁴⁷⁾」がもたらされる。

市場競争で利用される知識には二種類あると、ハイエクは言う。一つは、「もしある当局が彼らにそうするよう求め

たならば、彼らが列挙し伝達できるような事実の知識」である。もう一つは、「この知識の所有者が、どの種のものやサービスが望まれており、またそれらがどれだけ緊急に望まれているかについて、市場によって知らされるときにのみ、有効になるような、特定の状況を発見する能力」としての知識である。⁽⁴⁸⁾このように言うとき、ハイエクは、市場競争によらなければ利用できない種類の知識があるので、社会における知識の多寡にかかわらず中央当局が十分な知識を収集するのは不可能である、と主張しているようにも見える。というのも、「特定の状況を発見する能力」としての知識は、市場を通じてのみ、知られるからである。しかしここでハイエクが言うこの知識は、先に見た、技術的知識における思考の技術と同じものだと考えるべきだろう。それを全て中央当局に集中するのは、ばかげた発想であった。ここでハイエクが言うことも、それと同じであろう。「特定の状況を発見する能力」としての知識は、当局に知識を集中するという非現実的な状況であれば利用できるけれども、そもそもそれは非現実的なことから、実際には利用できない、と言っているにすぎない。

ハイエクは、市場競争の結果について、「誰かが所有している、もしくは獲得しうる全ての知識が、ある一当局によって命令され、コンピュータにかけられるとすれば（しかしながら、発見の費用はかなりのものだろうが）われわれが生産するであろうものには、もちろん及ばないだろう」と述べている。もっとも、市場の成果を、「既知の達成方法がない理想的水準と比較する」のは不公平であろう、とも述べている。⁽⁴⁹⁾このように市場の成果は、全ての知識を当局に集中できる仮想的な状況と比べて、利用可能な知識量で上回ることはなく、むしろ、下回るのである。

こうした市場競争を、ハイエクは「発見手続きとしての競争」と呼んでいる。

それが生じるのは、なぜだろうか。ハイエクは、「広範な労働の分業」によって知識が分散した社会において、「⁽⁵⁰⁾「予期せぬ変化への適応」が必要であることを指摘している。すなわち、必要な知識が多く、変化が頻繁であることが、

その原因だということである。

市場競争の必要性が、こうした事実的状況に依存することを、ハイエクは先進国と低開発国を比べるなかで明らかにしている。ハイエクによれば、先進国には、「技術的知識の進歩」の機会もあるけれども、ほとんどは「所与の所得水準を維持するため」の些少な変化の機会である。それに対して低開発国には、大きな「成長の可能性」が眠っている⁽⁵²⁾。このような説明は、先に見たシュンペーターの議論を想起させる。ハイエクは、先進国に大きな技術的進歩の機会が少ないという点でシュンペーターと共通しているけれども、先進国にも些少な変化の機会は必ず多数あり、それへの不断の適応を考慮すべきだという点で、シュンペーターと異なっているのである。

以上から、「発見手続きとしての競争」も、1940年の議論と基本的に同じだといえるだろう。

ハイエクは「発見手続きとしての競争」の中で、「均衡」と「秩序」という用語を区別すべきだ、と提案している。「均衡」とは、「事実がすでに全て発見されている」ことを前提としている。それに対して「秩序」は、「多様な程度で接近される」ことや、「変化の過程を通じて維持されうる」ことを表現できる⁽⁵³⁾。

このハイエクの説明は、「均衡」的経済観と異なる「秩序」的経済観を示したものに見えるかもしれない。しかし根本にあるのは、全ての知識が観察者にとって既知である静態的均衡状態が、条件の変化によって攪乱され、ふたたび均衡に戻るというプロセスである。ハイエクは、攪乱を均衡化へと導く調整の過程で、全ての知識を特定の当局に集中させるのではなく、知識を分散されたまま価格システムを通じる市場の役割を発見した。それに伴い、均衡状態も、完全知識ではなく、人々の計画が調整されて両立した状態とされた。

これはハイエクの大きな貢献であるけれども、これを、均衡的で静態的な経済観にかわる競争的で動態的な経済観の提示として捉えるべきではないと思われるのである。

注

- (1) これまでの筆者の検討は、拙稿「社会主義経済計算論争の諸解釈をめぐって」(『神奈川法学』46巻1号、2013年、121-146頁)、同「ハイエクと計算論争についての一考察」(『神奈川大学法学部50周年記念論文集』2016年、581-600頁)、同「ハイエクと社会主義の数学的方法」(『神奈川法学』48巻1号、2016年、1-21頁)。
- (2) Friedrich A. Hayek, "Socialist Calculation: The Competitive Solution", *Economica*, New Series, Vol. 7, No. 26, pp. 125-149. ハイエク自身が若干の手を加えて再掲した論文の邦訳として、「社会主義計算(3)——競争的「解決」」嘉治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』(新版ハイエク全集1-3) 春秋社、2008年、245-282頁があり、参考にさせていただいた。
- (3) "Socialist Calculation: The Competitive Solution", p. 125. 以下、傍点は原文イタリック。
- (4) *ibid.*, p. 126. (一部改変)
- (5) *ibid.*
- (6) *ibid.*, p. 127.
- (7) *ibid.*
- (8) 「ハイエクと社会主義の数学的方法」18-20頁。
- (9) 「ハイエクと計算論争についての一考察」584-587、591-597頁。
- (10) 「ハイエクと社会主義の数学的方法」6-8、19頁。
- (11) "Socialist Calculation: The Competitive Solution", p. 125.
- (12) *ibid.*, pp. 125-126.
- (13) *ibid.*, pp. 127-128.
- (14) Friedrich A. Hayek, "Present State of the Debate", F. A. Hayek ed., *Collectivist Economic Planning*, Routledge & Kegan Paul, 1935 (リブリン&版 *Socialism and the Market: The Socialist Calculation Debate Revisited Volume II*, selected by Peter J. Boettke, Routledge, London and New York, 2000), pp. 217-218. 迫間眞治郎訳「討論の現状」『集産主義計画経済の理論』實業之日本社、1950年、231頁。またハイエク自身が若干の手を加えて再掲した論文の邦訳として、「社会主義計算(2)——論争の状況」嘉治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』(新版ハイエク全集1-3) 春秋社、2008年も参考にさせていただいた。
- (15) "Socialist Calculation: The Competitive Solution", p. 130.

- (16) *ibid.*, p. 129.
- (17) *ibid.*, pp. 130-131, 134-135.
- (18) *ibid.*, p. 131.
- (19) *ibid.*, pp. 131-132.
- (20) *ibid.*, pp. 134-135.
- (21) *ibid.*
- (22) *ibid.*, pp. 135-136.
- (23) *ibid.*, p. 136.
- (24) *ibid.*, pp. 135-136.
- (25) *ibid.*, p. 136.
- (26) 「ハイエクと社会主義の数学的方法」 9-12 頁。
- (27) "Socialist Calculation: The Competitive Solution", p. 132.
- (28) *ibid.*, pp. 132-133.
- (29) 以下のハイエクの指摘は、*ibid.*, p. 139.
- (30) 「ハイエクと社会主義の数学的方法」 12-15 頁。
- (31) Joseph A. Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy*, Routledge, 1994 (1942), pp. 131-133, 172, 178, 189, 201, 中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義〔中巻〕』東洋経済新報社、1962 年、上巻 237-241 頁、中巻 312-3、324、346、370 頁。
- (32) "Socialist Calculation: The Competitive Solution", p. 140.
- (33) *ibid.*, pp. 132-133.
- (34) 「ハイエクと社会主義の数学的方法」 17 頁。
- (35) "Socialist Calculation: The Competitive Solution", p. 141.
- (36) 「ハイエクと計算論争についての一考察」 583-584 頁。
- (37) これと同じことを、ハイエクは第二論文でも語っていた。筆者は以前、「論争の状況」は、結局のところハイエクの社会主義批判が倫理的・心理的難点の指摘に帰着してしまっている」と述べたが、それは、これと同じことを指している。「ハイエクと計算論争についての一考察」584 頁、「ハイエクと社会主義の数学的方法」21 頁を参照。

- (38) Friedrich A. Hayek, "The Meaning of Competition" in F. A. Hayek, *Individualism and Economic Order*, Chicago, University of Chicago Press, 1948, pp. 92-106. 嘉治元郎・嘉治佐代訳「競争の意味」同『個人主義と経済秩序』(新版ハイエク全集Ⅰ-3) 春秋社、2008年、129-147頁。
- (39) *ibid.*, pp. 102-103. 邦訳142頁。
- (40) *ibid.*, p. 103. 邦訳143頁。
- (41) *ibid.*, p. 104. 邦訳144頁。
- (42) *ibid.*, p. 100. 邦訳139頁。
- (43) *ibid.*, p. 99. 邦訳138頁。
- (44) Friedrich A. Hayek, "Competition as a Discovery Procedure" in F. A. Hayek, *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, London, Routledge and Kegan Paul, 1978, pp. 179-190. 古賀勝次郎監訳、楠美佐子訳「発見手続としての競争」古賀勝次郎監訳『経済学論集』(新版ハイエク全集Ⅱ-6) 春秋社、2009年、187-202頁。
- (45) *ibid.*, p. 179. 邦訳187頁。
- (46) *ibid.*, pp. 181-182. 邦訳190頁。
- (47) *ibid.*, p. 184. 邦訳194頁。
- (48) *ibid.*, p. 182. 邦訳190-191頁。
- (49) *ibid.*, p. 185. 邦訳195頁。
- (50) *ibid.*, pp. 181-182. 邦訳190頁。
- (51) *ibid.*, p. 186. 邦訳195頁。
- (52) *ibid.*, pp. 188-189. 邦訳199-200頁。
- (53) *ibid.*, p. 184. 邦訳193頁。